



15.11.1



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

夕焼け

短い波長の青色が、途中でほとんど反射・吸収されてしまうので、残った長い波長の赤系統の色が届く。ちょうど湖畔の葦（あし）が、沖からやって来るさざなみ波を減衰させ、大きな波が岸边に寄せるように。こうして真っ赤な太陽は、まるで照明灯のように雲たちを赤々と照らし輝かせる。

この夕焼け、人類の誕生以来、空の絵巻として人々を慰めてきたに違いない。しかし夕焼けの空は短く、はかない。夕焼けの正反対が朝焼けである。その仕組みは夕焼けとまったく同じだが、夕焼けにはなぜか郷愁と同時に、明日への希望を感じさせる。実際、西の空が真っ赤な夕焼けに染まる翌日は晴れることが多い。

今日から11月、すでに木枯らし1号が吹いた。間もなく霜の便り。そして秋は行く。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

紅葉狩りの帰り、夕焼けが空一面に広がっていた。思わず遠く離れた故郷と幼なじみに思いを馳（は）せてしまった。

「真っ赤な太陽」という歌があるが、太陽はもちろん無色の白色である。真昼に太陽を仰ぐとまぶしくて真っ赤どころではない。しかし、日が西に傾くにつれて太陽光線は大気層を斜めに差すので、経路が長くなる。すると大気の下層付近には目に見えない微細なちりがいっぱい漂っているため、上空で散乱された太陽光中の



2015.11.8



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

筑波おろし

山脈の場合は山を越えて山麓に下る。ところが「おろし」の場合は台地や高原などで生まれた冷たくて重い空気が、何らかの原因で麓まで滑り降りてくる風を意味する。斜面滑降流と呼ばれ、アルプスや南極のブリザードなど世界各地にある。

それに引き換え筑波山は約900mの孤峰だから、気流が山を越えるほどではなく、むしろ「赤城おろし」などと同様、筑波地方に吹く北よりの強い空っ風にたいする地元の呼称と考えられる。

ちなみにフェーン（現象）は、湿った気流が山脈の斜面を滑昇するにつれて、水蒸気が凝結して生まれた雨を落としてしまい、乾燥した空気が斜面を下る途中で圧縮され暖められるので、風上より山麓の方が高温となる。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

撮影・橋本明弘

このところ暖かい天候に恵まれているが、8日は立冬。関東地方にも木枯らしが吹き始めた。木枯らしの主役はシベリア大陸育ちの高気圧だ。「西高東低」のしま模様の気圧配置が北西の風を吹きつける。

すでに大陸では太陽高度が日に日に低くなっており、日射が弱まる一方で放射冷却によって地表の熱が上空に逃げるため、冷たい空気が下層に滞留する寒冷な高気圧が発達中である。

さて気流が山にさしかかると、せき止められるか、越えるか、迂回（うかい）するのだが、